生産的労働論の展開（二）

飯盛信男

もくじ

第一章　社会的再生産と生産的労働
　第一節　スミス生産的労働論の正当性――社会的再生産の観点からする規定
　　（一）　スミスにおける生産的労働の二つの規定
　　（二）　社会的再生産の観点からする規定
　　（三）　スミスの正当性
　第二節　生産的労働の規定におけるブルジョア経済学の俗流化
　第三節　マルサスによる奢侈の擁護
　〈小括〉　……以上前号
第二章　資本主義的生産と生産的労働――スミスにおける歴史的形態規定の欠落……以下本号
　第一節　生産的労働の歴史的規定
　第二節　スミスにおける「資本を生産する労働」と「商品を生産する労働」との混同。スミスの俗流性
　第三節　スミスにおける「商品」「価値」把握の混乱
　〈小括〉
第三章　本源的規定および不生産的階級の規定
　第一節　生産的労働の本源的規定
　第二節　国家＝不生産的階級の規定
　　（一）　スミスにおける国家＝不生産的階級の規定
　　（二）　マルクスにおける国家＝不生産的階級の規定
第四章　結　　論

（飯盛）

第二章　資本主義的生産と生産的労働―スミスにおける歴史的形態規定の欠落―

第一節　生産的労働の歴史的規定

マルクスにおける生産的労働の歴史的規定とは、資本の価値増殖（その一般的定式は G―W―G'）の観点からする規定のことである。この観点からすれば、「資本と交換されて資本の価値増殖に役立つ労働」が生産的労働であり、「所得と交換されて個人的消費欲望を充足する労働」が不生産的労働である。前者にあっては資本家は自分の貨幣を資本として労働と交換し、後者にあっては自分の貨幣を収入として労働と交換する。生産的労働というのは、労働の特定の内容、労働の特殊な有用性、または労働が自分をそれに表わす独自な使用価値とは絶対になんの関係もない労働の一規定である。同じ種類の労働が、生産的でもありうるし、不生産的でもありうる。生産的労働の歴史的規定は労働の内容または労働の成果からではなく、労働の一定の社会的形態から生ずるところの、労働の一規定である。

資本にとって、労働の独自な使用価値というのは、労働一般（抽象的労働）としての労働量のことであって、労働がそれの費やす労働量をこえて提供する労働量の差額のことである。資本の価値増殖は、労働との交換においてのみ可能であり、この労働はそれゆえに、生産的労働と呼ばれるのである。これに対し、収入によって扶養される不生産的労働者は、買い手のために単なる使用価値を生産するのであり、商品を生産せず想像的または現実的使用価値を生産するだけである。不生産的労働者が彼の買い手のために少しも商品を生産しないのに、しかも買い手から商品をうけとるということは、彼の特徴である。

生産的労働者すなわち資本の価値増殖を担う労働者はすべて賃金労働者であるが、それだからといって、賃金労働者がすべて生産的労働者なのではない。資本主義的生産においては、一方では商品としての生産物の生産が他方では賃労働としての労働の形態が絶対的になる。そうすると、使用価値として買われ、サービスとして消費される労働の提供もまた賃労働の形態をとるようになる。だがその場合、彼の労働が消費されるのは、その使用価値のせいであって、交換価値をうみだすものとしてではない。労働が買われるのが、生きている要因として可変資本の価値と入れ替って資本主義的生産過程に合体されるためではない場合には、労働はけっして生産的労働ではなく、賃金労働者はけっして生産的労働者ではない。もともと貨幣は、貨幣が貨幣資本に転化するとか経済の一般的性格が変革されるとかいうことがなくても、すでに非常に古くからいわゆるサービスの買い手として現れていた。[1] 所得の再分配によって扶養される不生産的労働者の労働は、社会的分業の外部にあるのであるが、それは支配的生産様式の一般的諸法則によって規定されるようになる。すなわち収入と交換される不生産的労働もまた「賃労働」の形態をとり、彼らが受けとる報償もまた、賃労働の価格を規制する諸法則に従うようになるであろう。所得と交換されるサービス提供の価格がどのように規定されるか、また、この価格は本来の労賃とどんな関係をもつか、この価格は労賃の諸法則によってどの程度まで規制されどの程度までは規制されないかは、労賃にかんする特殊研究であるということになる。[2]

生産的労働とは、労働力が資本主義的生産過程において登場するところの全関係および仕方様式の簡略な表現であるにすぎない。「生産的労働とは、ただ、労働能力と労働とが資本主義的生産過程で役割を演ずるさいの関係と様式との全体をひっくるめた短絡された表現でしかない」。[3] 生産的労働の歴史的規定とは、社会的労働の生産力が資本の生産力として現れるというブルジョア社会の転倒性を表わしたものにほかならない。生産的労働者を賛美するスミスの生産的労働第一規定は、たんに「V部分をこえる価値追加」という認識にとどまっており、資本主義的生産様式を特殊歴史的なものとしては捉えきれていなかった。スミスの生産的労働第一規定の追随者たるリカードはもはや生産的労働者についてのスミスの情愛と幻想を共にしてはいなかった。彼にとって、生産的労働者とは他人の富を生産する労働者であり彼の存在はその手段としてのみ意味があるのであった。リカードは奢侈の必要を説くマルサスとの間で論戦を展開する

のであるが、彼もまたマルサスと同様に、「労働者は労働への刺激を失わないように、彼自身の生産物を自分のものにしてはならない」との立場にたっていたのである。

注（1）『資本論』第一巻、全集㉓四一ページ。
（2）『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、一一九ページ。『剰余価値学説史』全集㉖―Ⅰ、五一四―五一五ページ。
（3）『直接的生産過程の諸結果』一一七ページ。

第二節　スミスにおける「資本を生産する労働」と「商品を生産する労働」との混同。

スミスの俗流性

スミスの生産的労働の規定にあっては、「資本と交換される労働」という正しい規定と「商品に実現される労働」という副次的な規定とが並存している。資本が生産全体を征服し、したがって家内的で小さな自己消費を目的とした産業形態が消滅するのと同じ程度で、直接に収入と交換される不生産的労働の大部分は個人的なサービスだけを行うようになる。資本が生産全体を征服するのと同じ程度で、ますます生産的労働者と不生産的労働者とのあいだの素材的差異が現れる。そのばあい、生産的労働者すなわち資本を生産する労働者の特徴としてあげうるものは、彼らの労働が商品に、有形的生産物に、実現されるということとなろう。このことは、A・スミスをして、労働の素材的内容とは全く無関係な生産的労働の歴史的規定とは別に、第二の副次的規定をつけ加えさせた観点の一つである。

さらにスミスにおける「二つの規定」の並存は、資本主義社会の把握にあたって歴史的形態規定を欠いた「論理」のうえに成りたつものであった。すなわちスミスは、労働力商品範疇を析出しえなかったがゆえに、「自己労働にもとづく所有」から「他人労働の領有」への転換、すなわち単純商品生産から資本主義的生産への領有法則の転換を把握しえず、両者を区別しえなかった。このためスミスにあっては、「資本を生産する労働」という規定と「商品を生産する労働」という規定とは矛盾なく並存しえたのである。生産的労働の歴史的規定は、資本、賃労働関係を示す概念であり、小生産者は資本と労働との交換とは何の関係もないのであるから、生産的労働と不生産的労働の区分とは無関係である。彼らは、「商品の生産者であるとはいえ、生産的労働者の範疇にも、不生産的労働者の範疇にも属しない。彼らの生産は資本主義的生産様式のもとに包摂されていない」。[4] スミスのいう生産的労働と不生産的労働は、リチャード・ジョーンズによって正しくその核心に、すなわち資本主義的労働と非資本主義的労働に還元される。彼は、スミスのいう、資本による労働者への支払かそれとも収入からのそれかを正しく貫徹しているからである。[5]

スミスは、単純商品生産と資本主義的生産とを分離して把握しえなかったのであるが、彼は商品生産をも特殊歴史的なものとしては把握しえず、それを単なる物質的生産として捉える観点からは、スミスの俗流的側面が現れてくる。スミス段階のブルジョアジーは、物質的生産の代表者として、封建社会からひきつがれたイデオロギー的諸身分を攻撃した。だが、彼らによる生産的労働者の外観的賛美は、実際には地主や金貸資本家に対立する産業資本家の賛美にすぎなかった。その典型を我々は、産業資本家を唯一の生産的労働者だと賛美するデステュット・ド・トラシの『イデオロギー要論』（パリ、一八一五）[6]にみいだす。マニュファクチャ時代末期に位置するA・スミスもまた生産的労働を養う資本を使用する人々は彼ら自身生産的労働者である、とみなす俗流的見解をもっていた。彼は、諸資本によって生産的労働量が活動させられる順位として、農耕・製造業・商業・小売業をあげ、「それらの四つの方法のどれかに自分の資本を使用している人々は、彼ら自身生産的労働者である」[7]と言っている。さらにスミスは、資本家の不生産的消費・浪費をかれらの収入によって扶養される不生産的労働者の消費に帰着させ、資本家による収入の不生産的消費の責任は、彼らに寄生する不生産的労働者や「怠け者」の消費に還元される。すなわち彼は、「富者が年々に費消する収入部分は、たいていのばあい怠惰な客人や召使によって費消される」とか「収入の費消によって扶養されている大部分の人々の怠惰が、資本の使用によって扶養さるべき人々の勤勉を腐敗させる」とか強調しているのである。[8]

スミスは一方では、資本を生産するものが生産的労働者であるとしながら、他方では逆に蓄積された資本（ストック

）が人々を勤勉ならしめ、生産的労働者たらしめる、と考える。かかる資本関係の二面的把握は、労働力に投下される可変資本と、賃金によって買われる生産手段のストックを混同したことによる。かかる混同が生じたのは、収入の資本への転化ということが、生産的労働者の扶養のためにあらかじめ資本家によって蓄積される資本（ストック）の必要としてとらえられたことによる。[9] 資本関係のこのような二面的把握は、資本機能の物質的生産との同一視をもたらし、それは、セー（J.B.Say）の「生産的な役立ち」「生産の三要素理論」へと発展してゆく。セーは、A・スミスが人間の労働だけに価値を生産する力を帰属させたことを誤りだとして次のように言う。「より正確な分析が示すところでは、価値は、労働の作用というよりもむしろ、自然が供給する諸力の作用や資本の作用と結びついている人間の勤労によるものである」。[10] セーはA・スミスの著作を体系化し俗流化した。彼は土地・資本および労働を地代・利潤および労賃の自立的源泉と称することによって、俗流経済学的生産要素説（三位一体的定式）を基礎づけた。セーによる俗流化はさらにマカロック（J.R.McCulloch）によって完成される。[11] 彼は、諸商品が使用価値として通過する作業や、諸商品が使用価値として生産過程のなかではたす役だちを「労働」と呼んだ。それは、セーが名付けた「資本の生産的役立ち」や「土地の生産的役立ち」などの改名である。マカロックは、社会的に規定された人間の活動としての労働そのものを、諸商品が、使用価値つまり物としてもつ物理的などの作用と同一視している。すなわち、労働そのものの概念が破棄されてしまうのである。[12]

注（4）『剰余価値学説史』全集㉖—Ⅰ、五一八ページ。
（5）Jones Richard, Text-book of lectures on the political economy of nations. Hertford. 1852。大野精三郎訳『政治経済学講義』日本評論社。
『剰余価値学説史』全集㉖—Ⅲ、24章3(a)参照。
（6）Destutt de Tracy, Eléments d'idologie. Paris. 1826。
（7）スミス『諸国民の富』岩波書店Ⅰ、五六四ページ。
（8）同前、Ⅰ、五二九—五三三ページ。
（9）広田純、「生産的および不生産的労働について」『立教経済学研究』十六巻三号、十五ページ参照。
（10）『剰余価値学説史』全集㉖—Ⅲ、二三七ページ。
（11）J.R.Mc Culloch, The principles of political economy. London. 1830。
（12）『剰余価値学説史』全集㉖—Ⅲ、二三一—二四六ページをみよ。

第三節　スミスにおける「商品」「価値」把握の混乱

スミスは、資本としての価値の持続性・投下された価値が資本として維持されるということを、感性的にストックの素材的要素の耐久性として理解し、生産的労働の二重規定を実質的には社会的再生産の観点からする規定へと流しこみ、資本の価値増殖観点からする生産的労働規定の抽出に失敗したのであるが、その根底には「商品」「価値」把握における「耐久性」「不滅性」という重商主義的表象への後退があったと思われる。スミスにおける歴史的形態規定の欠落は、資本主義的生産と単純商品生産の混同のみならず、商品生産をも特殊歴史的なものとしてではなく、素材的な観点から物的関係として、捉える結果をもたらした。スミスは「商品」を歴史的範疇として、価値と使用価値の統一としては捉えきれていない。彼は使用価値と価値をいっしょに捉えており、価値の持続性は使用価値の持続性「耐久性」「不滅性」と同一視され、この結果当然にも前貸資本価値を越える「剰余価値を生産する労働」の規定もまた、感性的に捉えられることになってしまう。スミスの労働価値説の不徹底さについて、ローゼンベルグは指摘している。「第一にスミスはまだ価値のうちに人間諸関係の表現を看取していない。第二に、彼はまだ価値と使用価値とを混同している。使用価値は実際に動物によっても創造される」。[13] 以下にスミスの商品・価値把握における重金主義的偏向を検討してみよう。結論を先どりしていえば、スミスは重金主義が金銀とその他の諸商品とについてしたのと同様の区別を「商品」とサービスとについて、しているのである。[14] スミスは商品概念を耐久性・不滅性において捉えており、それはマルクス

の商品概念とはちがうのであり、したがって、『剰余価値学説史』ではスミスの「商品・価値」という術語には横線が付してあることに、留意すべきである。

重金主義者や重農主義者は、価値および剰余価値を、貨幣や農産物の現物形態においてのみ捉えていたのであるが、さらにスミスも、価値および剰余価値を、有形的商品一般のかたちでしか理解しえなかった。かくして、マルクスのスミスに対する決定的な前進は、価値の実体としての労働を労働生産物の素材的性質とは全くかかわりのない社会的労働とみなした点にあるといえるであろう。スミスの段階では再生産過程に入りこむものは有形的生産物、再生産過程から脱落するものはサービスであったから、再生産視点からする生産的・不生産的の区分は、価値概念の耐久性的偏向を媒介として、剰余価値生産視点からする生産的・不生産的の区分と一致するものであった。ストックとして蓄積されうる労働というスミス生産的労働論の第二規定は、社会的再生産過程把握への彼の健全な志向を示すものであり、個別資本の観点からする「資本を生産する労働」という規定と、社会的観点からする「ストックを生産する労働」という規定とが混同されたのは当然であろう。価値概念を正しく捉えていたならば、社会的再生産を価値補填・素材補填の統一として捉えることができたであろうし、また個別資本の再生産と社会総資本の再生産を区分することができたであろう。

スミスによれば価値形成労働は、「ある特定の対象または売ることのできる商品にそれ自体を固定し実現するのであり、その商品は労働が終ったのち少なくともしばらくの間は存続する。この対象は、のちに必要に応じてはじめにそれを生産したのと等量の労働を活動させることができる」[15]。これに対しサービス労働は、「ある特定の対象または売ることのできる商品にそれ自体を固定させたり実現したりはしない。サービスはそれが行われたその瞬間に消えてなくなり、のちにそれとひきかえに等量のサービスが獲得されるような痕跡または価値をそのあとに残すことはめったにない」[16]。このように、価値を社会的労働関係としてではなく、「耐久性・不滅性」として捉えたスミスによれば、「私が家に呼んでシャツを縫わせる裁縫女や、家具を修繕させる労働者や家を洗ったり掃除したりなどさせる召使や、肉など

を食べられる形にさせる料理女は、工場で縫う裁縫女工や、機械を修繕する機械工や、機械を掃除する労働者や、資本家の賃労働者としてホテルで調理する料理女とまったく同じように、彼らの労働を一つの物に固定し、事実上この物の価値を高める」[17]ということになる。家庭内で雇われる料理女の労働は、「物質的生産物に固定され、事実上ホテル所有者にとってそうであるのと同じように、その結果においては、販売しうる商品でありうる」[18]のである。他方で、資本と交換されるサービス労働については、スミスによれば劇場、音楽会等々の企業家は、そのサービスが「遂行されたその瞬間に消え去り」そして、「ある永続的な対象または販売しうる商品」に固定されたり実現されたりしないような「不生産的労働」を買うのであるが、だがそのサービスの公衆への販売は企業家に対し賃金と利潤を回収させるのである。

このようにスミスによれば、召使の労働でもそれが物財を生産すれば価値形成的であり、他方で資本と交換される労働でもそれがサービス提供に向けられるものであれば、価値形成的でない、ということになる。A・スミスの「耐久性」「不滅性」という表象には、富はそれが不滅的であり多かれ少なかれ耐久的である程度にしたがって評価され、結局は金銀が「不滅の富」として最高の地位を与えられるW・ペティの『政治算術』[19]の痕跡がみられる。商品・価値の概念は、「労働が生産物に物体化され、物質化され、実現されている」ということを含んでいるが、価値は社会的労働関係であり、社会的関係が物の形態で現れることから生ずる錯覚（商品物神性）にとらわれて「労働の物質化」を感性的に「耐久性」「不滅性」において捉えてはならない。「労働の物質化等々をA・スミスが捉えているようにスコットランド人的にとるべきではない。われわれが労働の物質化としての商品について語るばあいには、このこと自体は商品の想像的な、すなわちたんに社会的な、存在様式にすぎないのであり、これは商品の物体的な現実性とはなんの関係もない。商品は、一定量の社会的労働または貨幣として思いうかべられるのである」[20]。

人間のなんらかの欲望充足の機能を果す使用価値を生産し、しかも社会的分業の一環として社会のための使用価値を生産する労働が価値を形成する。価値は使用価値によって担われるのであるが、どんな使用価値によって担われるかは

問題でない。使用価値は生産物の有用性において表現されるのであり、それが充足させる欲望は胃袋から生ずるものであろうと空想から生ずるものであろうと関係ない。サービス労働においては労働の有用効果そのものが使用価値としてあらわれることについてマルクスは次のように強調する。「サービスは一般に、どの商品とも同じように、その労働が提供する特殊な使用価値を表わす表現にほかならない。といっても、それが労働の特殊な使用価値を表わす独自な表現であるのは、この労働がサービスを物として提供するのではなく、活動として提供するというかぎりにおいてである」[21]。さらにマルクスは『剰余価値学説史』のなかで、スミスが農業労働のみが社会の実質的収入を増加させるとする重農主義の主張に反対して、製造業者もまた価値を生産することを強調した文章を引用したあとで、さらに続けて「サービスの価値」を強調している。「消費用物品のうちに入れられるものには、どの瞬間にも、財貨の形で存在する消費物品とならんで、サービスとして消費しうるある量の物品がある。したがって消費しうる物品の総量は、どの瞬間にも、消費しうるサービスがない場合のそれよりも大きい。また第二に、その価値もより大きい。なぜなら、その価値はこれらのサービスがうけとる諸商品の価値に等しく、また、サービスそのものの価値に等しいからである。というのはこの場合は、商品と商品との交換のすべての場合と同じように、等価物にたいして等価物が与えられるのであり、したがって同じ価値が二重に、一度は買い手の側に、一度は売り手の側に、存在するからである」[22]。

サービス提供すなわち非物質的生産は、①生産者とも消費者とも別な独立の姿をもち、したがって生産と消費の中間で存続することができ、売れる商品としてこの中間で流通することができる使用価値の生産、②生産されるものが生産する行為から不可分なばあいの二つに区分できるが、マルクス段階においては、この領域での資本主義的生産の現象は、とるに足りないものであった[23]。さらに役人のサービスは「押しつけられるサービス」[24]であり、それは社会の上部構造に属し、その提供者は「政治的な不生産的労働者」[25]である。

スミスの価値論における重金主義的偏向についてはすでに『経済学批判要綱』のなかで次のように指摘されていた。

「剰余価値は物質的生産物で表現されねばならない、とはA・スミスにもなお現れている未熟な見解である。役者は、芝居を生産するかぎりではなく、彼らの雇主の富を増加させるかぎりで、生産的労働者である。ところが、どんな種類の労働がおこなわれるか、つまりどんな形態で労働が物質化されるかということは、この関係にとってはまったくどうでもよいことである」[26]。『剰余価値学説史』第一巻の最後でマルクスは、「われわれはここでは、まだ、生産資本、すなわち直接的生産過程で使用される資本だけをとりあつかうべきである。流通過程の資本については、あとでとりあつかう」[27]と強調している。このことからマルクスは、非有形的使用価値をうむサービス労働と、価値の形態転換のみに携わる商業労働とを厳密に区別しており、スミス批判の形で展開されているサービス労働論も、たんに「資本と交換される労働」という形態規定との関連だけでなく、商業労働とは異質のものとしてのそれの価値形成的性格を論じているものとみるべきであろう。

『剰余価値学説史』における「サービスの価値」にかんする叙述は、いまだ未熟な見解を示したものであるとの指摘が一部にみられるが、『資本論』二巻一篇資本循環論において、マルクスは、「その生産過程の生産物が新たな対象的生産物ではなく商品ではないような産業部門」のなかで経済的に重要なものとして交通業をあげ、交通業が生産する使用価値は場所変換という「有用効果」であり、この有用効果の生産に要した労働量がその価値を規定する、と指摘している。交通業の有用効果にかんする指摘は、物質的生産の延長である商品の運輸と消費過程に位置する人間の運輸、いずれにも妥当するものであって、有用効果という規定は、社会の消費過程に携わるサービス労働一般に妥当すると考えるべきであろう。サービス部門の大部分はマルクス段階において、いまだ社会的分業の体系に包摂されておらず、支配階級への個人的奉仕の形態にとどまっていたがゆえに、マルクスはサービス部門を分析対象外とし、そのなかで無視しえない唯一の例外として交通業についての指摘を与えたのであった[28]。

注（13）D・I・ローゼンベルグ『資本論注解』青木書店・①二五五―二五六ページ。スミスによれば役畜もまた労働し、したがっ

て価値を生産することになる。『剰余価値学説史』、全集㉖―Ⅰ、三七四ページ。

(14) 『剰余価値学説史』、全集㉖―Ⅰ、三一六ページ参照。

(15) スミス『諸国民の富』岩波書店Ⅰ、五二二ページ。

(16) 同前、五二三ページ。

(17) 『剰余価値学説史』、全集㉖―Ⅰ、一七七ページ。

(18) 同前、一七八ページ。

(19) W.Petty, Political Arithmetik, London. 1699. 大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波文庫、六七―六八ページ。

(20) 『剰余価値学説史』、全集㉖―Ⅰ、一八六ページ。

(21) 同前、五一三―五一四ページ。

(22) 同前、一八二ページ。

(23) 同前、五二二ページ。

(24) 同前、二四二ページ。

(25) 同前、二五三ページ。

(26) 『経済学批判要綱』Ⅱ、二四九ページ。

(27) 『剰余価値学説史』、全集㉖―Ⅰ、五二五ページ。

(28) 『資本論』第二巻、全集㉔、68―69ページ。

〈小括〉

『剰余価値学説史』における「サービスの価値」の叙述は、かつて国民所得論構築の観点からする生産的労働論争において、様々に議論されたものであった。[29] 価値形成労働を物質的財貨をうむ労働のみに限定する伝統的立場からはこの叙述は次のように捉えられていた。すなわち、スミスによる生産的労働の第一規定と第二規定を、それぞれマルクスの歴史的規定と本源的規定とにあたるものとみなし、マルクスは、スミスが両規定を混同させたこと、すなわちスミス生産的労働論における歴史的形態規定の欠落を徹底的に批判するあまり、必要かつ十分な説明のワクをこえるかにみえる叙述がなされた、という捉え方である。「サービスの価値」にかんする指摘は、そのままの形でではなく、割引した形で、本源的に不生産的なサービス労働も資本関係に組み入れられるならば歴史的規定からは生産的労働である、という意味で捉えられるべきものとされた。[30]

スミスの第二規定「価値を形成する労働」は、実質的には物的関係において「ストックの再生産」の観点から与えられているのであるが、次章でみるようにそれはマルクスの本源的規定に相当するものではない。スミスにはもともと労働過程と価値増殖過程の二者闘争性の認識がない。いわゆる物質的生産の概念はスミスによって形成されマルクスに継承されたのではない。スミスには有形的か否かという区分があるだけであり、自然と人間の間の物質代謝の概念はマルクスによって始めてうちたてられる。スミスは資本主義的生産と単純商品生産とを概念的に区分しえなかったことから、第一規定「資本を生産する労働」を第二規定「商品・価値を生産する労働」に流しこみ、しかも商品・価値を耐久性・不滅性という素材的形態において捉え、社会的形態においてとらえきれなかった。この結果、「一般になにかを生産し、なにかのものに結果する労働はすべて、おのずから生産的労働である」[31]と考えたのである。スミスは、重金主義が金銀とその他の諸商品とについてしたと同じ区別を、商品とサービスとについてしている。両者のちがいは、重商主義が区別の基準を貨幣蓄蔵の形態においたのに対し、スミスは区別の基準を再生産の形態においていることにある。[32]『剰余価値学説史』における「サービスの価値」の叙述は、スミスの生産的労働規定の未熟さの原因を、商品・価値概念把握の混乱に求め、それを批判したものであり、積極的に評価すべきものであると思われる。「剰余価値を生産する労働」を正しく規定するためには、まず価値概念の正しい規定が必要なのであり、『剰余価値学説史』における「サービスの価値」規定はその意味で理解すべきであろう。スミスが、「資本を生産する労働」という正しい規定を貫きえずそれを「ストックを生産する労働」と混同したこと、すなわち資本関係の物的関係への還元の原因は、まさに彼の価値概

念の未熟さ、すなわち耐久性・固定性という感性的な「価値」把握にあったのである。

商品は商品そのものと労働力商品とからなるのであり、商品を生産する労働を生産的とするスミスの第二規定によれば、生産的労働とは、商品を生産するような労働、または、労働能力そのものを直接に生産し、形成し、発展させ、維持し、再生産するような労働であることになろう。スミスにおいて商品、価値を生産する労働とは、実質的には労働力の再生産に役立つ労働ということであったが、「労働力の再生産」という規定を貫けば、のちの俗流経済学説の如く、精神的生産や上部構造の活動をも生産的とせねばならなくなるであろう、との配慮からA、スミスは、労働能力そのものを直接に生産する労働を彼の生産的労働の項目から除外した。それはマルクスが指摘する如く、「もし彼がそれを含めたならば、彼は生産的労働についてのまちがった主張に門戸を開くことになる、というある種の正しい本能をもって」であったが、それは、生産的労働の範囲を有形的生産に限定するというスミスの立場からする除外にすぎない。『剰余価値学説史』のこの箇所は、労働力そのものを直接に生産するいわゆるサービス労働の価値形成の問題で論争点となっているのであるが、ここでは価値形成的か否かが論じられているのではない。スミスにおける商品・価値は有形的な耐久性として捉えられているのであり、商品・価値を生産する労働とは彼にとっては、再生産に役立つ労働＝ストックを生産する労働であり、「ある種の正しい本能」というのもこの再生産観点からのものであった。[35]

注（29）たとえば、金子ハルオ『生産的労働と国民所得』（日本評論社、一九六五年）。なお次稿において私自身の見解にもとづく生産的労働論争の批判を展開する予定である。

（30）遊部久蔵『労働価値論史研究』（世界書院一九七二年）一一八ページ。西川清治「国民所得といわゆるサービス労働」、『経済学雑誌』五〇巻二―三号、五九―六一ページ。

（31）『剰余価値学説史』全集㉖―Ⅰ、五〇〇ページ。

（32）同前、三七四ページ。

（33）同前、一八七ページ。

（34）「スミスの〈生産的労働〉概念の二重規定は、〈利潤〉範疇の二面的規定に、すなわち、〈利潤〉の〈剰余労働の対象化〉としての、また、〈資本家が彼自身に前貸した生活維持費の回収＝所得・消費ファンド〉としての、二面的な把握に対応する」。富塚良三「アダム・スミスにおける資本の再生産と蓄積」、福島大学『商学論集』23巻6号。二一四ページ。

（35）金子ハルオ氏は『生産的労働と国民所得』一章四節で、スミスによる生産的労働の二つの規定を重商主義、重農主義との関連で検討しておられるが、スミスの第二規定をそのまま「商品を生産する労働」としてうけとり、スミスの価値論における耐久性的偏向（重商主義との関連）、それが実質的には社会的再生産の観点からする生産的労働の規定であること（重農主義との関連）には、言及されていない。

第三章　本源的規定および不生産的階級の規定

第一節　生産的労働の本源的規定

スミスにおける生産的労働第二規定をもって、マルクスのいわゆる本源的規定に相当するとみなす見解があるが、[1]もともとスミスには労働過程と価値増殖過程を区別して両者を「対立の統一」において捉えるという認識はないのであり物質的生産・使用価値の生産一般がスミスにあっては、その抽象性においてはとらえられず、すでに「資本主義的生産時代の扮装」[2]のもとにあらわれていた。スミスの第二規定「有形物に固定されて、ストックとして蓄積されうる労働」という規定は、スミスが物質的生産をその抽象性において理解しえず、そこに資本属性をもちこんだことの結果である。耐久性、不滅性というのは物質的生産一般の属性ではない。その規定は、投下資本の自立的価値としての維持を、生産物の質料的属性（耐久性・不滅性）と混同したものであり、価値増殖過程と労働過程とがいっしょに捉えられているのである。[3]マルクスは『経済学批判・序説』において「生産一般」の規定を抽出する意義を次のように強調している。「生産一般にあてはまる諸規定が分離されなければならないというのは、まさに、統一性――それは主体である人類と客体である自然とが同じだということからもすでに生じてくる――のために本質的な相違が忘れられないようにす

るためである」[4]。これを忘れるところに、たとえば、既存の社会的諸関係の永遠性と調和とを証明する現代の経済学者たちのいっさいの知恵がある。以下に、『経済学批判・序説』における「生産一般」規定の検討をとおして、生産的労働の本源的規定の意味をさぐってみよう。

マルクスは『序説』第一節第二項〔分配・交換・消費に対する生産の一般的関係〕のなかで「消費と生産の直接的同一性」について次のように言う。

① 生産は直接に、主体的にみても客体的にみても、また消費でもある。生産することでその能力を展開する個人は、また、生産の行為でその能力を支出し使いへらす（主体的な消費）が、それは、自然的生殖が生命力の消費であるのとまったく同じである。また生産手段の消費（客体的な消費）は、生産物に結果するのであり、生産的消費である。

② 消費はまた直接に生産でもある。それは自然界で元素と化学成分の消費が植物の生産であるのと同じである。たとえば消費の一形態である食物の摂取によって、人間が彼自身の身体を生産することは明らかである。このことは、なんらかの仕方でそれぞれの側面から人間を生産する他のすべての種類の消費についてもあてはまる。すなわち「消費的生産」。これは第一の生産物の破壊から生ずる第二の生産である。第一の生産では、生産者が物となり、第二の生産では生産者によってつくられた物が人間となる。

③ こうして、生産は消費であり、消費は生産である。前者を生産的消費と呼び、後者を消費的生産と呼ぶ。この後者についての研究が、生産的労働または不生産的労働についての研究であり、前者についての研究は、生産的消費または非生産的消費にかんするものである。

ここでは消費的生産（人間生命の再生産）の観点からする生産的労働規定が、自然界における物質代謝と自然と人間の間の物質代謝との比較から、導きだされており、これはマルクスにおける生産的労働の本源的規定が最初に示されたものとみなしうるであろう。無機的自然・有機的自然・人間的自然という自然史の三つの発展段階をみれば、まず無機的自然においては、もとの物質の形態は物質代謝によって崩壊する。これに対し、有機的自然においては、物質代謝があることが生命活動を存立させる。さらに、人間的自然は、みずからの自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介するという点で、有機的自然にくらべて、自然に対してさらに自立的であり、能動的である。生産的労働の本源的規定が二度目にマルクスの著作に現れるのは、一八六一―六三年にかかれた『資本論』草稿においてであろう。彼は草稿の第一部「資本の生産過程」第一章「貨幣の資本への転化」の七項〈労働過程〉[5]において次のように指摘している。

「労働それ自体との関係で考察された労働過程の諸契機は、労働材料・労働手段・労働そのものとして定義される。この諸契機を逆の観点から、全過程の結果から、そのつくりあげられた生産物の観点からみるならば、それらを、生産材料・生産用具・生産的労働（他の表現を用いるべきであるかもしれない）と呼ぶことができよう」[6]。

この「生産的労働」という規定について、「他の表現を用いるべきであるかもしれない」と指摘されていることに注目すべきであろう。それは、本源的規定においては、生産的と不生産的の区分よりも、生産的労働論の意味そのものを問うことが重要であることを、示すものではなかろうか。

マルクスは『経済学批判・序説』の執筆時には、「生産一般」の内容を「商品・貨幣」の前に展開する意図をもっていたのであるが[7]、これは従来の経済学の伝統的篇別を継承したものであり、その内容は、「結果において、また全展開の結果として、はじめて明らかとなるであろう」[8]と指摘されるに及んで、生産一般を叙述する「広義の経済学」は、ブルジョア社会の運動法則を解明する「狭義の経済学」を仕上げたあとで、打立てられうるものとされたのである[9]。だが「生産一般」の内容は「商品」を出発点とする『資本論』体系の展開のなかで、生産関係を生産力との具体的係りにおいて解明していくなかで、序々に明らかにされてゆくものであった。すなわち「価値より前に出発点として措定された労働過程――これは、その抽象性・純粋な質料性のために、あらゆる生産形態にひとしく固有のものである――が、再び資本の内部において、ひとつの過程として、すなわち資本の質料の内部で生じ、資本の内容をなすところの過程とし

て現象する」[10]のであって、マルクスは剰余価値生産の機構を解明するさいに、まず、労働過程一般の考察を行ったのである。こうして『経済学批判・序説』の「生産一般」で論じられた本源的規定は、『資本論』第一巻第三篇第五章第一節「労働過程」において叙述されることになる。それは労働過程と価値増殖過程の二者闘争性の論理において、生産力の発展にそくして捉えられている。

本源的規定は、自然への働らきかけをとおしての生活資料の獲得が人間生活の第一の前提であると同時に、自然への働らきかけを通して人間自身の自然、人間の潜在的諸能力がひきだされ発展させられることを示した概念である。それは価値形成労働の境界を定めるための概念ではない。本源的規定を価値形成労働の境界を定めるための基準とみなす立場によれば、労働過程の変革が視野に入らず、社会的総労働の個々の部分が全体から切り離されて、それが物質的生産であるか否かに焦点が据えられる。本源的規定は自然と人間の連関に係る概念であり、価値は人間相互の社会的労働関係である。前者は労働過程の変革に即して、後者は社会的分業の発展に即して考察すべきであろう。価値形成労働の境界はすでに『資本論』冒頭商品論で規定されている。労働過程論とそれにもとづく本源的規定における生産的労働概念は、『資本論』一巻三篇五章一節を出発点として、同第四篇においてさらに発展させられている。マルクスにおける生産的労働論は、その本源的規定と歴史的規定との区別づけ、労働過程と価値増殖過程の二者闘争性把握にもとづく両規定の「対立の統一」における把握にこそ、その本質があるのに対し、スミスにあっては、国富増進の観点からプラスであるかマイナスであるかという区分が軸となっており、歴史的形態規定を欠いた彼の論理においてはもともと価値増殖過程と区別された労働過程の視点はないのであって、したがってマルクスの本源的規定に相当するものもないのである。スミス段階においては、資本の価値増殖の観点と国富増進の観点とは〈ストックとして蓄積されうる労働〉という規定を媒介として、一致しうるものであった。すなわちスミス段階において、資本と交換される労働は素材的にみれば有形的生産に携わる労働であり、また国富の源泉である労働力の再生産に入りこむのも素材的には有形的生産に携わる労働であった。スミスの生産的労働論は、資本の価値増殖の観点からする規定と社会的再生産の観点（国富増進）からする規定の、二つから構成されており、両者が明別されることなく並存しているのである。

ここで付言しておけば、マルクスにおける生産的労働の本源的規定は、労働の対象化物たる客体に対して、労働がそれを創造した唯一の主体であることを強調し、したがってまた労働のみが価値、剰余価値をうむ唯一の主体であることを強調するという側面ももっており、このことによって、本源的規定は、価値の生産、分配を転倒した形で、資本―利子、土地―地代、労働―労賃、という形でとらえる三位一体的定式、物神崇拝的仮象に対する批判規定をなしているのである。[11]本源的規定において労働のみが唯一の価値の源泉であることをふまえたうえで、次に価値、剰余価値を形成する労働の境界線が問題となろう。マルクスが、「資本主義的労働過程は労働過程の一般的な諸規定を廃棄しはしない」[12]といっているのは、資本主義のもとでの生産的労働の「物神崇拝的仮象」＝三位一体定式批判の意味で理解すべきであろう。

注（1）例えば、○越村信三郎『スミス経済学説』一九四六年、日本評論社。○大内力「生産力理論におけるスミスとリスト」、『社会科学研究』一九四八年四月号。○遊部久蔵『古典派経済学とマルクス』（一九五五年、世界書院）第一章。

（2）『資本論』第二巻、四七八ページ。

（3）広田純「生産的および不生産的労働について」、『立教経済学研究』十六巻三号、三九ページ参照。

ソ連邦における生産的労働論研究の中心的人物であるソロトコフも近著『資本主義のもとでの生産的労働研究の方法』（一九七四年、モスクワ）のなかで、スミスによる生産的労働の第二規定に対する俗流経済学の攻撃にかんする『剰余価値学説史』の論述を検討しているが、ソロトコフはスミスによる第二規定をマルクスにおける生産的労働の本源的規定としてしか捉えていない。ソロトコフにあっては、生産的労働論の問題は、価値論・国民所得論の導き手としてしか考えられておらず、またマルクスにおける二つの規定を論理次元の相違としてしか捉えていない。本源的規定と歴史的規定とを資本主義のもとでの労働過程と価値増殖過程の二者闘争的性格を基礎として「対立の統一」において把握しようとする立場はみられない。

○M.V.Solodkov, L.S. Krylov. Metodologiya issledovaniya proizvoditelnogo tryda pri kapitalizme. MGU.

1974。p.96—107
なおソロトコフの生産的労働論については、拙論「生産的労働とサービス部門—ソ連邦における最近の論争」、九大『経済論究』三一号、をみよ。

（4）『経済学批判』国民文庫、二七一ページ。
（5）『資本論』では第一巻第三篇「絶対的剰余価値の生産」冒頭におかれている「労働過程論」がこの草稿段階では、「貨幣の資本への転化」の論理次元に位置づけられている。この点について詳細には○佐藤金三郎「〈経済学批判要綱〉における『貨幣の資本への移行』について」。大阪市立大『経済学年報』第十七集
（6）ロシヤ語版マル・エン全集、第二版・補巻47巻、六六—六七ページ。
（7）佐藤金三郎「経済学批判体系と生産一般」、『経済学雑誌』三九巻六号、をみよ。
（8）『経済学批判要綱』Ⅱ、二四一ページ。
（9）エンゲルス「反デューリング論」、全集⑳一五二・一五五ページ。
（10）『経済学批判要綱』Ⅱ、二二四ページ。
（11）この点を強調したものとして、○盛田常夫「生産的労働とその物神崇拝的仮象について」、『一橋研究』二七号。
（12）『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、一一〇ページ。

第二節　国家＝不生産的階級の規定

（一）　スミスにおける国家＝不生産的階級の規定

社会的再生産から脱落する奢侈・浪費的消費手段の生産を不生産的とするスミスの規定は、社会の上部構造を担う人々を不生産的階級とみなす見解につらなっている。すなわちスミスは『国富論』二篇三章において言う。

「社会のもっとも尊敬すべき諸階級のあるものの労働は、召使のそれと同じように、価値についてはまったく不生産的であって、またこの労働は、それがすんでしまったあとまで持続したり、あとになってそれとひきかえに等量の労働を獲得しえたりするある永続的な対象または販売しうる商品に固定されたり実現されたりはしない。たとえば、主権者ならびにその下に奉仕する司法や軍事のいっさいの官吏も、全陸海軍も、不生産的労働者である。かれらは公共社会の使用人であって、他の人々の勤労の年々の生産物の一部分によって扶養されている。かれらのサービスは、たとえどれほど名誉あるもので、またどれほど有用で、さらにどれほど必要なものであろうとも、あとになってそれとひきかえに等量のサービスを獲得しうるなにものをも生産しない。共同社会の保護、安全および防衛、すなわち今年度のかれらの労働の成果は、今後一年間のその保護、安全および防衛を購買しないであろう」。(13)

スミスはこのように、国家権力の本質を不生産的階級として、彼らの消費によっては、社会に新しい富をもたらしえないものとして描いた。彼の不生産的な政府に対する憎悪は、社会および国家の全体をまだ支配しきれていなかった、まだ革命的なブルジョアジーの立場を代表していた。スミス段階の資本家は、生産力の発展を担う歴史的に進歩的な役割をはたしており、勤労者とともに生産的労働の代表者であったがゆえに、国家機構の排撃者でありえた。政治と経済の矛盾を認識し、国家機構の要員を「不生産的階級」として規定したのは、A・スミスが最初であるが、スミスは国家を富の生産のためのたんなる手段とみなしたうえで、国家機構の維持（政治）と経済（資本蓄積）の間の矛盾を考え、その枠内で「安価な政府」の主張がうまれたにすぎない。彼は、過度の国家経費の膨張が、資本蓄積を阻害し、自由競争のメカニズムを侵害すると主張したにとどまっている。資本主義を永遠の生産様式と信じたスミスは、国家を階級抑圧機構として捉えたのではなく、たんに「富の生産のための手段」にすぎないとみなしたのである。これに対し、マルクスによれば、国家は労働者階級と資本家階級の間の階級的矛盾の反映であり、敵対的な経済的利益の対立の政治的解決手段なのである。(14)

スミスにおける生産的労働と不生産的労働の区分はすでに第一章でみたごとく、実質的には社会的再生産の観点から規定され、耐久性・固定性という素材的規定を基準としている。国家機構の要員を不生産的とする規定も、この耐久性固定性という基準から帰結されるのであり、召使等と同様にたんなる寄生的人口の地位におかれるのである。スミスによる国家＝不生産的階級の規定は国富増進の観点から与えられているにすぎず、マルクスが国家を社会的再生産の外部

にあって階級関係を維持するものと把握した方法とは全く異なるものなのである。古典学派は、まだ歴史的に進歩的な役割を担っていたブルジョアジーとともに、国家機構に対して厳正かつ批判的な態度をとっていたのであるが、地歩を固めてしまったブルジョアジーにとっては、階級支配の維持のために国家機構の強化が必要となり、その「経済学的」な正当化（俗流的経済学説）が必要となるのである。[15]

注（13）スミス『諸国民の富』岩波書店Ⅰ、五二三ページ。

（14）池上惇「ブルジョア社会の国家形態への総括とはなにか」、『経済論叢』九七巻四号。島恭彦・池上惇「マルクスにおける国家と経済」、『経済論叢』一〇二巻五号。参照

（15）『剰余価値学説史』、全集㉖―Ⅰ、三六九―三七一ページ参照。

（二）　マルクスにおける国家＝不生産的階級の規定

マルクスがブルジョア国家機構の要員を「不生産的階級」と規定する根拠をみてみよう。その手掛りは『資本論』一巻四篇12章4節「マニュファクチャのなかでの分業と社会のなかでの分業」に求めることができる。

社会のなかでの分業と一つの工場内での分業とは本質的にちがっている。マニュファクチャでは比例関係の鉄則が一定の労働者群を一定の機能のもとに包摂するのであるが、これに対して、いろいろな社会的労働部門のあいだへの商品生産者と彼らの生産手段との配分では偶然と恣意とが複雑に作用する。

「作業場内での分業ではア・プリオリに計画的に守られる規則が、社会のなかでの分業では、ただア・ポステリオリに、…市場価格の晴雨計的変動によって知覚される……自然必然性として、作用するだけである。マニュファクチャ的分業は、資本家のものである全体機構のただの手足でしかない人々にたいして資本家のもつ無条件的な権威を前提する。社会的分業は独立の商品生産者たちを互いに対立させ、彼らは、競争という権威のほかにはどんな権威も認めない。それだからこそ、マニュファクチャ的分業、終生にわたる労働者の細部作業への拘束、資本のもとへの部分労働者の無条件従属を、労働の生産力を高くする労働組織として賛美するブルジョア的意識が、同様に声高く、社会的生産過程のいっさいの意識的社会的な統御や規制を、個別資本家の不可侵の所有権や自由や自律的〈独創性〉の侵害として非難するのである」。[16]「資本主義的生産様式の社会では社会的分業の無政府とマニュファクチャ的分業の専制とが互いに条件になり合うとすれば、これに反して、それ以前の諸社会形態では諸産業の特殊化がまず自然発生的に発展し次いで結晶し、最後に法的に固定されたのであって、このような社会形態は、一方では社会的労働の計画的で権威的な組織の姿を示しながら、他方では作業場のなかでの分業をまったく排除するか、またはそれをただ矮小な規模でしか発展させないか、または散在的偶然的にしか発展させないのである」[17]。

一般的な原則としては、次のように立言することができる。「権威が社会のなかでの分業を支配することが少なければ少ないほど、ますます作業場内の分業は発達し、そしてそれはますます一個人の権威のもとに置かれる。だから、作業場内における権威と社会における権威とは、分業にかんしては、互いに反比例するのである」[18]。こうして資本主義は前近代社会における権威による社会的生産の統轄（共同体的規制を）根本的にくつがえすのであり、ブルジョア社会における社会的分業の規制者は自由競争、価値法則、周期的過剰生産恐慌にほかならない。ブルジョア国家はそれ以前の国家とは異なり、社会的生産の管理から疎外され、純粋の階級抑圧機構、「不生産的階級」として規定されることになる。マルクスが国家機構の要員を「不生産的階級」と規定する根拠は、彼らが社会的分業、再生産の外部にあって階級関係を維持するものであり、資本の専制のための業務が国家機構として集中されたものとする点にある。そうであるが故にマルクスはこの「不生産的階級」とその労働を次のように呼んでいる。

「サービスはまたおしつけられるものでもありうる、例えば役人のサービスなど」、

「部分的に生産的でないばかりか本質的には破壊的な人々」

「労働者が賃金のうちから国家や教会に納めなければならないものは、彼におしつけられるサービスのための控除である」、

「政治上の不生産的労働者」[19]。

ブルジョア国家機構の要員はこのように社会的分業の外部にあって階級関係を維持する「不生産的階級」として規定されるのであるが、国家独占資本主義と呼ばれる資本主義の現段階では、国家機構は統治、抑圧の機能とともに、再生産過程の一部を担うようになる。このことをもって、ブルジョア社会の総括者としての国家を、「政治的国家」と「経済的国家」の二側面をもつものととらえる立場がうまれる。すなわち、権力機関としての規定とは独立した「経済的国家」が想定される。[20] だが国家の再生産過程への介入は、独占利潤の保証と階級支配の維持、貫徹を目標としているのであって、社会的分業総括の機能を担うものではない。慢性インフレ、国際通貨危機、世界不況はブルジョア国家が経済過程の総括者たりえないことを示している。国家機構に組み入れられて再生産のなかで機能する労働者は、「不生産的階級」としての機能を同時に担わされているとみるべきであろう。社会的分業の一環を担う生産的労働者の不生産的階級への組み入れによって、国家の本質が変化するものではなく、変化したのは生産的労働者が同時に不生産的階級の役割を担わされる、ということである。[21]

資本主義の全般的危機に対応する国家独占資本主義のもとでの国家機構の肥大化＝不生産的階級の肥大化は、資本主義的生産様式に固有の労働過程と価値増殖過程の二者斗争性的矛盾の激化の反映、生産力と生産関係の矛盾の激化の反映ととらえねばならない。それは、生産力の社会化に対応した生産関係の適応＝社会化ではなく、生産関係＝私的資本主義的領有形態を暴力的に維持することにその本質がある。最近の公共経済学の潮流は、租税と公共サービスを等価交換にみたて、一般的商品流通の法則内部に政府部門をおしこもうとする試みを提出している。[22] この試みは「高福祉・高負担」「受益者負担」原則の理論的支柱となりうるであろう。このような試みの批判は、ブルジョア社会の総括者としての国家の機能を「階級関係の維持」「政治的総括」に求める見解によってのみ、可能であろう。かかる試みは、スミスですら認識していた政治と経済の矛盾、具体的には「不生産的階級」の存在そのものを経済理論上から抹殺してしまう結果となっている。[23]

注（16）『資本論』第一巻、全集㉓四六六ページ。
（17）同前、四六八ページ。
（18）『哲学の貧困』国民文庫、一八二―一八三ページ。
（19）順に、『剰余価値学説史』全集㉖―Ⅰ、五一五・一九〇・二四二・二五三ページ。
（20）例えば、わが国の井汲卓一・今井則義氏らの見解。
（21）池上惇「不生産的階級と生存競争の組織化」、『経済論叢』一一〇巻五号、参照。
（22）例えば、岡野・根岸編『公共経済学』有斐閣・一九七三年。
（23）池上、前掲論文参照。

第四章　結　論

スミスにおける生産的労働の二つの規定は、通説に言われる如く、マルクスの生産的労働論における本源的規定と歴史的規定に相当するものではない。スミスの生産的労働論においては、資本の価値増殖の観点と国富増進の観点との二つの観点が並存しており、マルクスは、前者の歴史的規定が後者の超歴史的規定へと流しこまれるというスミスの歴史的形態規定の欠落を批判すると同時に、スミスの国富増進の観点からする「ストックとして蓄積され再び生産的労働の動員に役立つ労働」という規定を、社会的再生産の観点からする生産的労働の規定（もちろん不完全な形ではあるが）として積極的に評価している。[1]

スミスにおける歴史的形態規定の欠落は、彼における生産的労働の第一規定「資本を生産する労働」と第二規定「商品を生産する労働」の区分を不明瞭なものとすると同時に、商品、価値概念自体を耐久性、固定性という素材的観点から把握する結果をもたらし、この結果「資本を生産する労働」という規定は、再び生産的労働の動員に役立つ耐久的なストックを生産する労働、という規定に還元させられる。すなわちスミスにおいては、資本を生産する労働→商品を

生産する労働→ストックを生産する労働、という思考が基底にある。スミスにおいては、「資本を生産する労働」という正しい規定と、資本の価値としての持続性を素材的な耐久性と混同（資本関係の物的関係への還元）しストックを生産する労働を生産的とする転倒した規定とが並存しているのであるが、前者の正しい規定をとっても、当時の歴史的発展段階からすれば、有形的生産物に結果する労働が生産的であり、サービス提供は不生産的であった。当時、有形的生産は資本関係に包摂されると同時に、労働力再生産のための手段を提供する部門であり、逆にサービス提供は資本関係には包摂されておらず、浪費的、奢侈的欲望の充足手段であった。

マルクスは、生産的労働と不生産的労働とをそれらの素材的な内容によって規定しようとする欲望として、次の三つのものをあげている。すなわち、①資本主義的生産様式に特有な、そしてその本質から生ずる呪物崇拝的な見解、②労働過程そのものを考察すれば、労働が生産的であるのは、ただある生産物に結果する労働だけであるということ、③現実の再生産過程では、再生産的な物品に表わされる労働と他の単なる奢侈品に表わされる労働とのあいだには、大きな相違があるということ。[2] この三つの事情はまさに、スミスが資本を生産する労働をストックを生産する労働と混同した根拠であった。①、②の事情による混同はまさにスミスの非科学性を示すものであったが、③の事情については意味が異なるであろう。社会的再生産の観点からする生産的労働と不生産的労働の区分を提示したことは、再生産過程把握へのスミスの正常な感覚を示すものであった。スミスの誤りは、再生産観点からする生産的労働規定を提示したことそのものにあるのではなく、それを資本の観点からする生産的労働の規定（歴史的規定）と混同、同一視した点にある。彼が立脚したP…P循環視角は、社会総資本の再生産（国富増進の視点）を個別資本の運動（価値増殖視点）と同一論理次元でしか解明しえず、したがって両者の同一視をもたらした。個別資本の価値増殖の把握のためにはG…G′循環視角が必要であり、P…P循環視角では価値視点が脱落し、資本循環が単純な自然的過程として捉えられる。だが同時に、P…P循環は、素材補填の観点のみという不完全な形でではあれ、社会的再生産への接近を可能とするものであり、この観点から再生産に再び入りこむ労働（ストックとして蓄積される労働）と再生産から脱落する労働（サービス）との区分がひきだされるのである。[3]

労働力の再生産に役立つストックを生産する労働を生産的とするスミスの規定は、「資本を生産する労働」という正しい科学的規定を物的関係に還元させたという点では大きな後退であったが、他方でこの規定は、P…P循環視点にたち労働力の再生産を軸とするスミスの体系にあっては、社会的再生産の観点からする規定と評価できるものであり、ケネー再生産論の継承とみなすことができる。マルサスを頂点とする俗流経済理論家たちが攻撃したものはまさにこの再生産規定であった。マルクスはスミス生産的労働論における再生産規定を評価するとともに、スミスにおける科学的な第一規定の不徹底の根拠が、耐久性、固定性という商品、価値概念の感性的把握の結果としての資本関係の物的関係への還元にあることを強調した。スミス生産的労働論の第一規定は個別資本観点、第二規定は社会総資本の観点とみなしうるものである。社会総資本の再生産は個別資本の運動とは事柄を異にするものであり、その分析は価値補填、素材補填の両視点を必要とするのであるが、資本の運動をP…P循環においてとらえるスミスにあっては、個別資本の再生産と社会総資本の再生産とは同一次元で論じられているのであり、生産的労働の第一規定と第二規定とはこの点からも、矛盾することなく並存しえたのである。商品、価値概念の正しい把握を前提として、G…G′視点が確立し、したがって生産的労働の歴史的規定が貫徹されるのであり、また価値、素材補填の統一としての W…W′ 視点からする社会的再生産過程の把握が可能となる。価値概念の耐久性的把握という限界のもとでは、資本循環はP…Pとしてしか捉えられず、またP…P視点から直接に再生産過程への接近がなされることになるのである。

通説では、スミスの生産的労働第二規定はマルクスの本源的規定にあたるものであり、マルクスの批判は、スミスにおける本源的規定と歴史的規定の混同に向けられているのであり、「サービスの価値」にかんずる叙述は、本源的に不生産的であっても歴史的には生産的であることを強調するための「誇張された表現」であると捉えられている。だが、

スミスにおける歴史的形態規定の欠落は、資本主義的生産を労働過程と価値増殖過程の統一として捉えることを許さず、資本関係を物的関係に還元させると同時に、本源的規定をも欠落させている。スミスの第二規定は第一規定からの派生物にすぎない。スミスは、資本主義的生産を生産の自然的形態とみなすブルジョア的視野の限界から、生産一般とその特殊、資本主義的形態とを区別できず、したがって生産一般という「一の合理的な抽象」による本源的規定をうちたてることはできなかった。一般的規定は、特殊的規定がうちたてられることによってはじめて定立されうるものであった。『剰余価値学説史』におけるスミス批判は、本源的規定と歴史的規定の混同にむけられているのではなく、資本の循環をストックの循環として捉える歴史的形態規定の欠落とりわけその主要契機となった価値概念の感性的把握（耐久性、不滅性）に対して向けられているのである。スミスにおいては結局、価値・剰余価値形成の問題が有形的か否かすなわち、再生産過程に再び入るか否かという問題に流しこまれている。サービス部門の腐朽性・寄生性を価値を生産せず所得の再分配過程に位置することに求める見解も、スミスと同様、価値、剰余価値生産の問題と社会的再生産の問題を混同しているのである。

スミスにおいては資本主義的生産における労働過程と価値増殖過程の二者闘争性の把握はなく、資本の価値増殖は国富増進と同一視され、国富増進の観点から社会的再生産がストックの再生産として捉えられ、生産的労働と不生産的労働の区分は有形的形態をとるか否かという形で、設定されるにすぎない。歴史的形態規定を欠いた国富増進の観点からする生産的労働の理論（歴史的に進歩的な役割を担っていた段階のブルジョアジーの理論）は、資本主義の確立、その矛盾の露呈とともに、もはや生産的労働の代表者ではなくなったブルジョアジーと俗流経済理論家たちの不生産的消費を擁護する理論にとってかわられるのである。これに対し、マルクスの生産的労働論は、労働過程と価値増殖過程の二者闘争性把握を土台として本源的規定と歴史的規定を「対立の統一」において設定し、さらに、社会的再生産の観点からする規定（再生産的と非再生産的との区分）と国家＝不生産的階級の規定をも含むものである。非再生産的分野の肥大化は資本主義に固有の二者闘争性の一表現として、また社会的分業（下部構造）の外部（上部構造）にあって生産関係を維持する不生産的階級＝国家の肥大化は、労働過程（生産力）と価値増殖過程（生産関係）の矛盾の激化への対応＝生産関係暴力的維持、としてとらえるべきであろう。

「自然と人間のあいだの物質代謝」の概念をもたず、労働過程と価値増殖過程を明別することなく一体として捉えたスミスは、労働過程をも感性的に捉えた。このことは労働過程における知的・精神的機能の無視に端的に現れている。この点は後発資本主義国ドイツに現れた歴史学派のF・リストによって以下のように強調されている。

「アダム・スミスは、法や秩序の維持、教育や宗教心、科学や技芸の育成等々にたずさわる人々の精神的労働にはけっして生産性をみとめなかった。彼の行なった研究は、物質的価値をうみだすような人間の行為に限定されている。この行為にかんして彼は、その生産性は実地に適用される場合の熟練と合目的性とに依存するということを認識してはいるけれども、この熟練の合目的性の原因の研究にあたっては分業よりさきには進まず、しかもこの分業をたんに交換から、また物質的資本の増加と市場の拡大とから説明するだけなのである。彼の学説は、ただちに、ますます深く物質主義・分離主義・個人主義へ落ちてゆく。彼が『価値・交換価値』という理念に支配されずに『生産力』という理念を追求していたならば、きっと、経済現象を説明するためには価値の理論とならんで独立の生産力の理論がなければならないということをさとるようになったであろう」(4)。

リストのこの指摘は、生産力の構成要素のなかに、「法や秩序の維持・宗教」のような上部構造の構成部分を含めている点では誤っているのであるが、スミスが生産力の構成要素を直接的に物質的生産に携わる労働としか捉えきれず、マルクスにおける「全体労働者」概念と「普遍的生産力・普遍的労働」(5)の概念を欠いていることを指摘している点では正しい。リストはここで、「価値の理論」と「生産力の理論」の区別を強調しているのであるが、スミスにおける「価値の理論」は、すでにみたごとくそれ自体素材的姿態にとらわれたものであった。労働過程と価値増殖過程の二者闘争性把握を欠いたスミスの理論は、「価値の理論」としても「生産力の理論」としても不徹底（実質的には両者の混同）であった。マルクスによる資本主義的生産に固有の二者闘争性の把握にもとづいて、生産力と生産関係の具体的な係り

が、換言すれば、「価値の理論」と「生産力の理論」とが統一的に構成される。我々はその典型を『資本論』一巻四篇における単純協業→マニュファクチャー→大工業という資本主義の発展段階の叙述（論理的とともに歴史的）にみることができる。[6]

注（1）「スミスは、分業労働の条件であるストック・すなわちスミス流の『資本』を再生産するか否かを基準にして生産的労働と不生産的労働とを分けている」。内田義彦『経済学の生誕』未来社、三一七ページ。

（2）『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、一二一―一二二ページ。

（3）P…P循環視角によるスミスの再生産過程把握については、小林賢斉「アダム・スミスの再生産論」、武蔵大学論集7巻二・三・四合併号をみよ。

『経済学批判要綱』におけるマルクスの再生産過程把握もまた、資本循環論の未確立により、P…P循環視角を基調としている。拙論「再生産論前史としての〈経済学批判要綱〉」、高木幸二郎編『再生産と産業循環』ミネルヴァ書房、一九七三年、をみよ。

（4）リスト、小林昇訳『経済学の国民的体系』岩波書店、二〇一ページ。

（5）この概念については、拙論、「生産的労働概念の構成」、九大『経済学研究』四〇巻三号、第一節をみよ。

（6）この観点からする『資本論』一巻四篇「相対的剰余価値の生産」の研究としては、坂本和一『現代巨大企業の生産過程』ミネルヴァ書房、一九七四年がある。

〈追　記〉

私はこれまで、現代資本主義のもとで顕著な拡大傾向をみせているサービス部門の理論的把握のために、生産的労働の理論の再検討をすすめてきたのであるが、現在までに公表した論稿は、第一篇　生産的労働論の現代的意義、第二篇　生産的労働論の展開、第三篇　ソ連邦におけるサービス労働論争、の三篇にわかつことができる。各々の篇を構成する主要論稿をあげておけば以下の通り。

第一篇　生産的労働論の現代的意義

○生産的労働概念の構成　九大『経済学研究』四〇巻三号、一九七四年十月。

○労働価値説とサービス労働　九州経済学会『経済、経営研究』十一集、一九七三年九月。

○社会的分業の発展とサービス部門　佐大『経済論集』七巻一号、一九七四年十二月。

第二篇　生産的労働論の展開

○同（一）　佐大『経済論集』八巻一・二号、一九七五年十二月。

○同（二）　佐大『経済論集』八巻三号、一九七六年三月。

第三篇　ソ連邦におけるサービス労働論争。

○ソ連邦における生産的労働論争、佐大『経済論集』七巻二号、一九七五年三月。

○生産的労働とサービス部門、九大『経済論究』三十一号、一九七四年三月。

○再生産とサービス部門、九大『経済論究』二九号、一九七三年二月。

以上の展開にもとづき、生産的労働論争の批判的概括を与えることが次稿（第四篇）の課題となる。